

# しっとりとした空間

光を淀ます二つの陰

指導教員 吉松秀樹教授 印

7AEB1228 曾根田 恵

## 1. 問題意識「拡大に潰されるスキマ」

都市を歩いている時、スキマは建築などの注目点の拡大によって押しつぶされ、記憶に残ることはほとんどない (fig.1)。しかしスキマの中に入ると都市から切り離されたような違和感を覚え、魅力を感じた (fig.2)。



fig.1 記憶からスキマを削除



fig.2 都市から切り離されたスキマ

### 2-1. 「スキマの中の二つの陰」

スキマは常に陰を纏い (fig.3)、湿気を帯びている。それにより、都市と異なった時間性・空気を与え、都市との距離を強く感じさせている。またこれら物理的な陰・湿度だけでなく、都市の陰が堆積することによってそこに光が重みを持ち、淀んだような、しっとりとした空間を生みだしている (fig.4)。



fig.3 スキマ壁面の陰

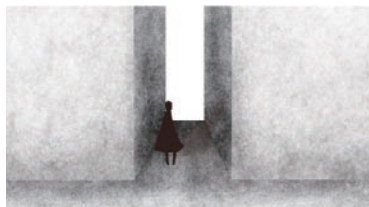


fig.4 しっとりとしたスキマ

### 2-2. 「しっとりとする陰」

しっとりとは適度な湿気があり、心地よく馴染んだ状態のことである。スキマのように物を視るために必要な量以上の陰があると、形だけでなく、質感や温度感を伝える (fig.5)。それが人間的なやわらかさや色気を表現し、都市におけるしっとり感の一因なのではないかと考える。



fig.5 陰の強さによって伝わる質感

## 3. 提案 I 「陰をつくる」

開口部の外側に壁を配置することで、光が強く差し込むことのない陰の空間を作る (fig.6)。壁面の壁を粗くし、光と陰の境界を曖昧にすることで (fig.7)、光の鋭さを抑え、やわらかな印象の陰を作り出す。

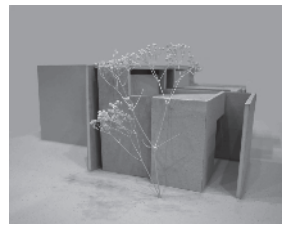


fig.6 模型北側

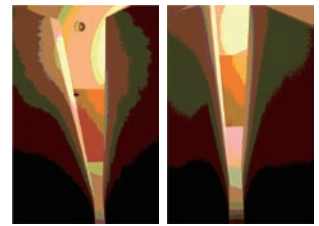


fig.7 粗い壁 (左) と細かい壁 (右)

## 4. 設計「陰のある住宅」

各室の間に強い光を配置し、陰の空間にギャップを生む。一度光を浴びることで、それぞれの空間に独立性が生まれ、時間や陰が切り離される。物理的な陰以外の生活の中でできる陰とが関係性を持つことにより陰の室が変化し、光が淀んだしっとりとした空間が生まれる (fig.8)。

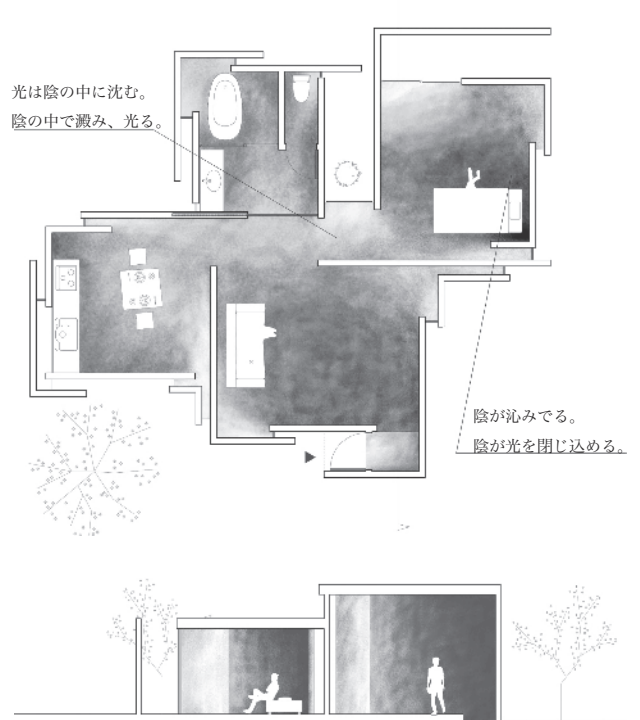


fig.8 陰のある住宅